

称号及び氏名	博士（言語文化学）	稲垣 裕子
学位授与の日付	平成26年3月31日	
論文名	福永武彦作品研究―「二十世紀小説」の方法―	
論文審査委員	主査	山崎 正純
	副査	田中 宗博
	副査	西田 正宏

要旨

本研究は「二十世紀小説」について、福永が体系的に考察し始める昭和二十八年以降に執筆された作品を対象とする。具体的には、特に作中人物固有の〈意識の流れ〉と〈内的時間^{リアリズム}〉という小説形式に着目し精読することで、福永が目指した「二十世紀小説」の方法について明らかにしたものである。以下、各章の概略を記す。

第一章の「廃市」論では、ローデンバッハの「死都ブリュージュ」を視野に入れ考察を進めた。これによって、従来の指摘にある白秋の「思ひ出」序文「わが生ひたち」や、ジッドの「狭き門」との比較考察のみでは捉えきれない作品成立の背景を明らかにした。すなわち、明治期に西洋から輸入され、受け継がれた一種の文学的背景ともなる水の町、すなわち水都のイメージの継承と展開についてを指摘した。また福永は、それに加えて『水の構図 水郷柳川写真集』を援用しつつ、「ブリュージュ」のような西洋的イメージをもつ水都を日本的風土へと移植し、独自の〈廃市〉＝現代のブリュージュとして提示して見せたことを明らかにした。

さらに「廃市」以前に試みられていた、「死都ブリュージュ」受容の一例と考えられる「河」という作品の存在に注目した。「廃市」でよく用いられる回想形式は、「河」（昭和二十三年）だけでなく、「廃市」（昭和三十四年）以降も用いられている。ただし、それらの作品は登場人物が思いがけず立ち現れる過去のイメージに、拘束され受動的にならざるを得なくなることを表出しようとするわけではない。「廃市」の「僕」が、自己内部に堆積した過去を語ることによって「安子」への愛を自覚したように、この一連

の作品は、現在時間の地盤となる過去と、〈想起される現在〉を結合させることが志向されている。いつしか封印されてしまった記憶の意味を問い直し、想起される過去と〈往還する現在〉を作中人物に見出させることが、回想の目的であった。この点において、福永作品に見出すことのできる回想形式^{ナラタージュ}という手法は、全面的に過去に従属する逃避を描くためのものではなく、現在時間に対する抗いであり、流動的かつ自発的な機能を発揮する物語り行為であったといえよう。いわば、福永作品における記憶と時間は、作中人物が現在に想起される過去を把握することにより、現在時点から過去を展望する可能性として主題化される。「廃市」に引き続き、このような反復する記憶と時間が果たす役割は、「海市」（昭和四十三年）にも窺えるものである。

第二章の「海市」論では、作中人物が長らく囚われ続ける己の過去が、その語りによって今現在に再現する意味についての考察を行った。「海市」論はその構成の音楽的な評価に争点が置かれてきたが、実際「海市」の構成を考えたとき、この音楽的構成は作品の一側面にすぎないと考えるべきであろう。新たな評価軸を定める手掛かりとなるのは、福永が多量の示唆を受け取ったジッドの「贋金づくり」である。この作品は、第二次大戦後のフランスで発表された前衛的な小説作品群ヌーヴォーロマンを継承した小説ともいえ、従来の近代小説的な枠組に逆らって描かれている。たとえば、「海市」の冒頭に注目すれば「私はこの話を、私が蜃気楼を見に行ったところから始めたいと思う」という語りからも、「私」＝渋谷太吉が語り手であることは自明である。ところが彼、彼女の三人称からなる断章は、語り手が誰であるのか曖昧であり、先行研究において神の視点と言われたり、総合的な別の語り手の存在が指摘されたりもした。しかし、西田一豊も注目する「自分に関しては過去の挿話を一つ一つ、順序もなく、その重みを量ることもなく、思い出すことであり、他人に関しては、彼等のあり得べき挿話を、一つ一つ、順序もなく、想像して愉しむことだけ」だという渋谷の発言から、彼と彼女の断章は渋谷自身の想像である、という読みの可能性が浮上してくる。つまり、「海市」という作品は、作者の世界観を読者に「押しつける」伝統的小説ではなく、プロットの一貫性や心理描写が抜け落ちた、ある種の実験的な小説、いわば言語の冒険小説ともいえよう。それゆえ読者は、与えられたテキストを自分で組み合わせ、推理しながら物語や主題を構築していかざるを得ない。いうなれば、この小説は、読者を受け身の享受状態にとどめる従来の小説と異なり、読者の自由な想像力に呼びかけて、読者と共に自己の内的世界に問いかける文学なのである。福永は「海市」において、あえて筋や人物の性格や物語的時間を排除し、未整理の材料だけを提示することで、読者が積極的に創作行為に参加することを要請するのである。

第三章「冥府」論では、ややもすれば抽象的かつ観念的といわれる「冥府」（昭和二十九年）という作品理解のために、福永の病床体験だけに根差すのではない「暗黒意識」について、改めて問い直した。従来の「冥府」論は、もっぱら作品の独自性を作者の病床体験に基づく意識、すなわち「暗黒意識」の表出に求め、小説世界を作者福永にひきつけ理解するという立場に立っていた。つまり、後に発表され

る「深淵」「夜の時間」とを合わせて夜の三部作と呼ばれる「冥府」は、作者自身の膠着した意識から脱却を図るために執筆された、という単純な構造として理解されてきたといえる。しかし、本論では先行論のように、病床体験下に棄損した福永の主体性が回復に向かう兆しを作品の背後に窺うことはせず、作品自体が持つ成立背景を分析し、そこに備わる固有の創作方法を明らかにしようと試みた。

注意すべきは、この「冥府」という中編小説は単に『夜の三部作』の一角を担うだけの小説ではないという事実である。福永は『夜の三部作』の初版序文（昭和四十四年十月）で「その頃の私のノオトには「死の島」の *variation* と断ってあるように、「冥府」は私がそこで暮した死の島の一風景」だと述べる。つまり、ここには「冥府」が晩年の大作「死の島」へと続くモチーフと主題を併せ持った作品であったことが示唆されるのである。それゆえ「冥府」は、福永のテキスト群を通時的に考察しようとする際に、その端緒を開くテキストの一つといえる。そこで、本章では「冥府」の成立要因を検証し、このテキストが後のテキスト群と構想上どのように関わり合っているのか、サルトルの「出口なし」を補助線に考察した。

さらに、現代小説の方法を拡張しようとする福永は、サロートが『見知らぬ男の肖像』で試みた登場人物の「個」と「一般」という相克する意識や方法にも着目したと考えられる。それゆえ、あえて福永は死後の世界である冥府を舞台とし、もはや何者でもない人間存在の追究と、言明された主体の揺らぎを描くのだ。そこには「冥府」という世界の絶対的な法則に取り込まれてしまった人間の、その一生を必然として捉えることの違和と否定が示唆されている。つまり「冥府」という作品は、ついに他者によってしか承認され得ない不条理な人間存在を描く手法として、実験的な「方法小説」であると同時に、この小説に「固有の方法」を目指したものといえるであろう。そのように考えたとき、「冥府」という作品は、既成の方法を扱い続ける小説に対する抗いであり、その概念を崩すために「暗黒意識」という思索を表現した、積極的な観念小説であった。

第四章「風のかたみ」論では、芥川の「六の宮の姫君」と堀の「曠野」が強く意識され、その形成に大きく関与していたことを、長編「風のかたみ」(昭和四十一年～四十二年)の成立過程を辿ることで明らかにした。

「風のかたみ」はこの二作品が想起され、これらとの比較の上で享受されることによって、その独自性を新たに発揮する。この間の事情を論証する手掛かりとして注目されるのは、いずれの作品にも共通する題材として『今昔物語集』の巻第十九「六宮姫君夫出家語第五」が意識されていたという点である。とりわけ各作品の主要人物である三人の「姫君」造形に焦点を当てることは、彼らの相互影響を考察する上でも重要であり、「風のかたみ」に見られる独自の生と自我意識を新たに浮上させるだろう。そのため、衰弱した「姫君」像の類型を切り抜けるには、「姫君」の属する貴族社会とは異なった社会に生きる、他者を造形する必要があった。たとえば「町屋の娘」である「楓」や、「信濃」から上京した「次郎」が造形され、彼らは「萩姫」と同じく思い出すべき過去と、生い立ちを持つ人物として詳細に描かれるのである。そこに福永が「六の宮の姫君」「曠

野」といった短編の系譜を承けつつも、長編という形式を選んだ一つの理由が窺えると論じた。

第五章「死の島」論では、福永武彦文学の集大成と目される「死の島」が、どのような執筆立場で描かれたのかについて明らかにした。原爆文学という一つの枠組みで「死の島」（昭和四十一年～四十六年）が論じられるとき、原民喜「夏の花」や太田洋子「屍の街」のように、当事者の体験記録、あるいは証言として読むことはできない。しかし、福永は原爆を普遍的な「魂の問題」と捉え、それを個人のより切実な内面世界として描こうとしている。福永は「純粋小説」という個人の内面をひたすら深く掘り下げていく方法を取り、その方法を「内的時間^{リアリズム}」と称した。「内的時間^{リアリズム}」とは、福永が主題として掲げる「孤独」や「死」が必ずしも頭で作り出した抽象的なものではなく、自分の「魂」を揺さぶる確かな感覚として把握されていることを証明するための手立てなのである。それは人間の「魂」の内奥を見つめようとする、その意識の動きを追い続けるという意味で福永独自の「純粋小説」といえる。本論では被爆者である主人公「素子」の内面から窺える時間と空間のねじれを考察することで、しだいに溶解していく「素子」の自我意識に着目し、福永の作品系列における「孤独」の系譜を詳密に描く作品として捉え直した。

第六章「海からの声」論では、福永の完結した作品としては、最晩年の短編である「海からの声」について論じたものである。「死の島」でひとまず閉じられた作品世界の円環が、「海からの声」以後どのように発展し得たのか、について考察した。少なくとも、福永の意識の中では、「死の島」執筆後に発表した作品「海からの声」は、閉じられた円環からの新たな出発として位置づけられていたと認められる。とはいえ「海からの声」が、それまでの総作品と作風を全く異にするわけではなく、「喪失感」「精神の死と生への憧憬」など、福永のそれまでの作品群と共通する原形的モチーフも窺える。そこで、この短編が新たな「別の仕事」としての一作品目といえるのならば、具体的にはどのような点であり、手法であるのかについて明らかにしようとした。また、折々に飛来しては去って行く渡り鳥の鳴き声を、生者が亡き人の声に聞きなすという日本の基層文化に属する構想が持ち込まれた点に着目し、夭折した魂と、生者の魂が響き合う再生と浄化の物語として、「海からの声」に新たな読解が可能となることを提示した。

以上、本研究は六章構成を以て、福永のいう「二十世紀小説」の達成を跡づけた。全体を通して、福永独自の小説の方法意識に着目し、その手法の中核となる「内的現実^{リアリズム}」を検証することで、福永作品において小説の形式と主題が、実際にどのように構想され、作品化されたのかについて明らかにすることを試みたものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、福永武彦の作品に描かれた〈意識の流れ〉と〈内的時間〉に着目し、福永が目指した「二十世紀小説」の方法について明らかにしたものである。また、福永の尖鋭な方法的実践を、現在時間に対する抗いとしての言語遂行的行為として位置づける試みとして興味深い考察を展開しており、福永武彦研究の現在の水準に照らし、十分にその学術的価値を認めることができる。言語文化学専攻「博士論文審査基準」に定める五つの基準に照らしつつ、本論文の学術的成果として評価される点について具体的に述べることにしたい。

①研究テーマが絞り込まれている。

本論文の中で論者は、福永武彦の代表的な作品を最晩年の作品まで年代順に捉え、一貫してそれらの読み直しと再評価を試みている。具体的には福永自らの切実な体験と、彼自身が創作する小説世界＝虚構とを、その作品世界に現実の因果律を離れた無秩序な〈時間構造〉を持ち込むことによって繋ぎ、独自の小説を実現させようとしたのだと論じる。それは、福永が先鋭な前衛小説^{スーヴオーロマン}における方法を意識することで、既成の小説方法や制度化した小説への対抗運動として、どのように作品を書くことが可能なのか、と問う福永自身の課題意識を明らかにすることであり、福永の小説手法が切りひらく〈時間構造〉の解明をテーマとし考察することである。したがって、研究テーマの一貫性を求める本専攻の審査基準第1項を十分に満たしていると判定する。

②研究の方法論が明確である。

福永はフランス文学の最先端を担う文学運動の一つとしての前衛小説^{スーヴオーロマン}の試みを、制度化した文学に新たな可能性を拓くものとして注目しており、福永の文学批評、戦後日記、書簡などの一次資料も可能な限り分析の対象としている。また、読者参加型の小説という方法に注目することにより、読者自らが能動的に作品の時間を時間を選び取ることで、登場人物の〈今・ここ〉が更新され、創造されるという「読者の想像力」に委ねられた方法論を明らかにした。さらに福永自身が使用する「暗黒意識」「魂の問題」「内的現実」等の抽象的な語句を、福永が参照し得た先行する社会思想、哲学、文学思想との関連を補助線としてその意味内容を明らかにすることで、従来の研究では捉えることができなかった作品の構造を明晰に浮かび上がらせることに成功している。したがって、方法論的的確さを求める本専攻の審査基準第2項を十分に満たしていると判定する。

③先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

福永の生前の日記が公刊された2012年以降、福永武彦研究は質量ともに急速に充実し、本論文もその流れの中にある。審査委員会では、学位論文審査実施要項の規定（第5 審査 第2条の（1））に沿い、各章で扱われた作品の先行研究一覧の提出を学位申請者に要請した。学位申請者から提出された「先行研究一覧」によって、特に近年の研究状況が本論文とどのように関係するかを確認することができた。本論文は、全体にわたって先行研究が精査され、批判的考察が十分に施されたものであり、先行研究に対する知見の深さを求める本専攻の審査基準第3項を十分に満たしていると判定する。

④結論に至る論理の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文は、福永の最初の長編小説「風土」から晩年の大作「死の島」に至る作品が円環を描くように

連続し、両作によってその円環が閉じられたとする福永自身の言明を前提とし、第六章「海からの声」論において、福永が更なる新しいテーマに挑もうとしていたと論じている。しかし、本論文には「風土」を論じた章が存在しないため、円環が閉じられたとする福永の言明が検証されておらず、「死の島」以降の展開を論じる第六章の論述の根拠が極めて脆弱である。本論文の体系性を保証するために、「風土」論が書かれるべきであったと審査委員会は判断する。ただし、各章の作品論の論理的一貫性については、十分な配慮が払われており、本専攻の審査基準第4項を満たしていると判定する。

⑤当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

従来の福永武彦研究は作品と原典との対照研究や、福永の自作自解を論拠として、音楽的に読み解こうとする試み、作者の実体験に基づく読解、或いは愛の不可能性を指摘するものが多く、作品の芸術的象徴性が強調される一方、福永の小説方法に対する思考と作品との関係が軽視される傾向がみられた。それに対して本論文は、福永の作品を丹念に解読したうえで、同時代の資料を援用し、福永の書簡や日記、交遊関係なども考察の視野に入れることで、作品の生成の過程を実証的に明らかにした。

福永武彦研究が新たな段階に入ったといえる現在、本論文によって明らかにされた福永の「時間構造」を描く実験的手法は、福永文学の核心に位置する貴重な知見であり、今後の研究の進展に逸することの出来ない学術的価値を有するものと認められる。

以上述べてきたように、稲垣裕子氏の本論文が福永武彦研究に新たに付加した知見は、今後の研究の展開に裨益するところが大きい。本論文は博士論文審査基準を十分に満たしており、審査委員会による慎重かつ厳正な審査の結果、本研究が博士（言語文化学）の学位に値するものと判断するものである。